

この小論は、[岩波『科学』2020年10月号](#)に掲載されたものの著者最終稿です。

[1]タイトル（サブタイトルあり）

感染は「自業自得」か—状況の力の解明に挑む社会心理学者たち

Do they get what they deserved? : Exploring “situational power” with social psychology

三浦麻子・平石界・中西大輔

Asako MIURA, Kai HIRAISHI and Daisuke NAKANISHI

新型コロナウイルスに感染する人は、自業自得だと思う

I think anyone who gets infected with the Coronavirus (COVID-19) got what they deserved.

本稿は、感染禍がもつ「状況の力」を読み解こうとする社会心理学者たちが、その過程で1つの意外なデータに出会い、それをどう捉え、どう付き合っているかの顛末記である。

「状況の力」を読み解く社会心理学

社会心理学は、人間の思考や感情、あるいは行動が、自分以外の他者が存在することによって影響を受ける過程を科学的に研究する学問である⁽¹⁾。心理学というと、性格のような人間の内面にのみ注意を向け、それを読み解く学問だと思われがちだが、社会心理学では、人間の心理に影響する要因として、内面だけではなく、どんな状況に置かれるかに注意を向ける。例えば、アーレントはナチス政権下のドイツでホロコーストの実行者となったアイヒマンの行為を「悪の凡庸さ」だと評したが、戦時に数多く観察される残虐な行為の原因は行為者自身の極悪非道にのみ帰せられるわけではなく、「そうするのが当然」な状況に置かれたことによっても生じうる。戦争のような極端な事例でなくとも、私たちの心は日々、状況によって動かされている。こうした「状況の力」を読み解こうとするのが社会心理学である。

感染禍という「状況の力」

2020年1月以来、新型コロナウイルス感染症の流行は瞬く間に世界中を非常事態に陥れた。唐突で急激な状況の変化は人間の心理にどんな影響を及ぼすのか。感染禍は「格好の」研究対象となった。社会心理学者は、状況の力を科学的に検討するために様々な工夫を凝らす。たいていは、特定の状況を模した実験室に参加者を置いて反応を記録したり、その場面を想定させる文章を読ませて回答者に見解を問う調査をしたりするのだが、実験や調査に落とし込む過程で生態学的妥当性（現実場面を的確に再現できている程度）が失われる。現実の状況の力を解明したいのに、常にそれとの乖離に苛まれながら研究している社会心理学者にとって、感染禍を研究しない選択肢などあろうか、いや、ない、とばかりに、自然実験（現実社会に自然に生じた状況変化を利用して因果関係を考察する手法）に着手した多くの研究チームの1つが私たちであり、実施したウェブ調査に含めたのが冒頭の質問項目である。

私たちの主たる関心は、この感染禍において、人間の行動免疫システム（感染リスクのあるモノや人、状況を避けようとする心理システム）がどの程度活性化するか、またそれと自分が所属しない集団の回避や排斥、あるいはその裏返しとしての自分が所属する集団の称揚や自国政府の強権的行為の是認との関連を検討することであった。感染禍の影響には、世界に共通するものと、文化という状況（典型的には東洋と西洋）により異なるものがあるから、日本だけではなく米英、そして当時最大の感染禍に遭っていたイタリア、ウイルスの原発地とされる中国でデータをとることにした。

この小論は、[岩波『科学』2020年10月号](#)に掲載されたものの著者最終稿です。

「自業自得」項目が測定しているのは、内在的公正推論（新型コロナウイルス感染のように、ある人物に起こった不運な出来事の原因を、そのような因果関係の推定が物理的に不可能であるにもかかわらず、その人物の過去の道徳的失敗に帰すること）の程度である。前述した主たる関心とはやや外れるこの項目を含めたのは、日本ではアメリカよりも内在的公正推論が行われやすいという知見⁽²⁾を得ていたからだ。感染禍という状況のスナップショットを撮るために、必要なアングルの1つだと考えた。

データがもつ確実さと曖昧さ

2020年3月下旬（中国のみ4月下旬）に各国で収集したデータを集計して（表1）、正直なところ驚いた。日本で「自業自得」を肯定した回答者は合計11.5%で、その多くは「どちらかといえば」というごく弱い態度表明であるとはいえ、他国より非常に高い。多数を占める否定についても、他国では「まったく」という強いニュアンスが大半なのとは傾向が異なる。確かに前述の知見を支持する結果だがここまでとは、と思い、巷間よく見聞きする、感染した人が謝罪し、周囲がその人の科だと責めるという、感染者がまるで加害者であるかのような扱いを受ける構図と重なった。

表1「感染は自業自得」に対する回答の度数分布と得点化(1-6)した平均値（2020年3～4月調査）

国	回答者数	まったく1 そ　う	あまり2 思　わ	どちらかとい えば3 な　い	どちらかとい えば4 そ　う	やや5 思　う	非常に6	平均
日本	400	29.3%	36.5%	22.8%	8.0%	2.5%	1.0%	2.21
アメリカ	400	72.5%	22.5%	4.0%	0.8%	0.3%	0.0%	1.34
イギリス	402	78.6%	17.7%	2.2%	1.0%	0.3%	0.3%	1.27
イタリア	479	75.6%	17.5%	4.4%	1.5%	0.4%	0.6%	1.36
中国	513	61.2%	23.8%	10.2%	4.3%	0.6%	0.0%	1.59

知り合いの新聞記者にこの話をし、記事にしたいと言われたとき、私たちはとても躊躇した。確かにインパクトはある。しかし「聞いてみたらこうでした」というただの度数分布や平均値を出してしまっているのか。論文公刊はおろか学会発表すらしていない。最初はお断りした。同じ状況に置かれたとしたら、おそらく多くの研究者は断り続けるだろうし、私たちも普段ならそうしただろう。しかし、感染禍という状況の力が、私たちの考えを変えさせた。このデータを出すことで、「自業自得」という考えに疑問を呈することにつながるなら、と思ったのである。

果たしてこのデータは多くの人々の関心を集め、その後も少なからぬマスメディアで報道されることになった。取材のたびに「なぜですか」と聞かれた。理由を知りたがる気持ちは理解できる。私たちだって知りたい。しかしそれを説明できるデータを持っていない。「わかりません」と答えるのはそう苦ではなかったが、心は「この結果がたまたまだったらどうしよう」という思いでざわついていた。

表2「感染は自業自得」に対する回答の度数分布と得点化(1-6)した平均値（2020年8月調査）

国	回答者数	まったく1 そ　う	あまり2 思　わ	どちらかとい えば3 な　い	どちらかとい えば4 そ　う	やや5 思　う	非常に6	平均
日本	1207	24.3%	30.2%	28.4%	11.5%	3.9%	1.8%	2.46
アメリカ	999	52.5%	32.1%	10.5%	2.9%	1.7%	0.3%	1.70
イギリス	1246	69.3%	23.0%	6.3%	1.0%	0.2%	0.2%	1.40

不確実さを低減するためには再びデータを取るしかない。8月に入って、日米英の3カ国で再度調査を実施した。サンプルサイズを大きくし、日本では性別と年代を人口統計になるべく合わせて代表性（母集団の結果を偏りなく反映する程度）を高める努力をした。ただし研究費不足で、他の2国では調査を

この小論は、[岩波『科学』2020年10月号](#)に掲載されたものの著者最終稿です。

実施できず、米英ではサンプルの代表性を確保することができなかった。結果は表2に示すとおりで、サンプルを変えても、時期が異なっても、同様の差異が見いだされた。正直なところ安心した。

しかし、これでもまだ私たちは「この傾向はただの偶然ではなさそうだ」という証拠を1つ手に入れただけで、「なぜそうなのか」という疑問に対する確たる答は相変わらず持ち合わせていない。過去の様々な知見と対応づけた解釈はできる。既存知見とは一致した傾向だし、規範が多く締め付けのきつい文化⁽³⁾ゆえにルール違反への寛容性が低いことや、不確実性の回避傾向が高い⁽⁴⁾ことが「お前のせい」「お前が悪い」という思いに結びつきやすいのかもしれない。しかしこれを推論の域に留めないためには、さらに研究を積み重ねていく必要がある。

「状況の力」の解明に向けて

新型コロナウイルス感染禍という状況の力は、少なからず私たちの社会構造を変えていくだろう。しかしそこには未知のことが多く、解明にはまだまだ時間がかかる。学問とは不確実なものを少しずつ解明していく営みであり、その過程では曖昧さへの耐性が必要となる。特に実証にもとづく科学では、数量データは一見すると確実そうな顔をしているだけに、なおさらそれに引きずられないようにしなければならない。今後の研究にも、このことを肝に銘じてあたりたい。

引用文献

- (1) Allport, G. W. (1985). The historical background of social psychology. In G. Lindzey and E. Aronson (eds.). *The Handbook of Social Psychology* (3rd ed., Vol. 1). New York: Random House. p. 5.
- (2) Murayama, A. & Miura, A. (under review). A cross-cultural comparison of engagement in ultimate and immanent justice reasoning.
- (3) Gelfand, M. J., Raver, J. L., Nishii, L., Leslie, L. M., Lun, J., Lim, B. C., ... & Aycan, Z. (2011). Differences between tight and loose cultures: A 33-nation study. *Science*, 332(6033), 1100-1104.
- (4) Hofstede, G. (2001). *Culture's consequences: Comparing values, behaviors, institutions and organizations across nations*. Sage Publications.

三浦麻子（みうらあさこ） 大阪大学大学院人間科学研究科教授。社会心理学者。コミュニケーションやインタラクションが新しい「何か」を生み出すメカニズムの解明に関心をもつ。著書に『なるほど！心理学研究法』（北大路書房）など。asarin@hus.osaka-u.ac.jp, <http://team1mile.com/asarinlab>

平石界（ひらいしかい） 慶應義塾大学文学部教授。進化心理学者。近年は道徳的非難を通じた道徳の進化に興味がある。編著書に『正解は一つじゃない 子育てする動物たち』（東大出版会）など。kaihiraishi@keio.jp, <https://sites.google.com/site/kaihiraishi>

中西大輔（なかにしだいすけ） 広島修道大学健康科学部教授。社会心理学者。社会的文脈における意思決定の問題や社会的影響について適応論の観点から研究している。著書に『あなたの知らない心理学』（ナカニシヤ出版）など。nakanisi@shudo-u.ac.jp, <https://www.daihiko.net>